

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

竹

平成29年3月第1週放送

三月に入りますと、だんだんと暖かい春の季節が訪れます。今年^{おとす}は新年を迎えてからの寒さがことのほか^{きび}厳しかったので、春の訪れを待ちわびていた方も多い事でしょう。

今の時期は、^{けんざいよう}建 材 用 の 竹 を 切 る 季 節 が ち ょ う ど 終 わ っ た 頃 に あ た り ま す 。

「木六竹八（きろくたけはち）」という言葉があり、「木」は旧暦六月、「竹」は旧暦八月を過ぎてから二月頃までの冬の間^{みずあ}に切るものとされています。特に竹は水揚げが止まってから乾燥して材質が締まり、虫が付きにくく、また腐りにくくなる時期だからだそうです。

これは、^{かやぶき} 萱 葺 屋 根 の 萱 を 屋 根 に 固 定 す る 、 “ 押 鉾 ” と い う 細 い 竹 に は 特 に 大 切 で 、^{おしほこ}これが屋根の中で腐ってしまうと萱葺屋根が崩れてしまうのです。

さて、旧暦三月、現在の暦では四月に入る頃を、俳句の季語では「竹 秋」竹の秋^{ちくしゅう}といいます。これは、竹の子に養分を費やすために竹の葉が黄色く変わる様子が紅葉^{こうよう}の様に見えることから付いた呼び方とされています。

竹の葉が色付くと、風に吹かれて細かい葉が舞い散り、雨樋などに降り積もってお掃除が大変ですが、「ああ、春が来たな」と感じるものです。

そんな季節、竹の子がそろそろ出る頃、^{ひょうはく} 漂 泊 の ^{はいじん} 俳 人 、 種 田 山 頭 火 (た ね だ さ ん と う か) が 詠 ん だ 句 が あ り ま す 。

『ひとりひっそり 竹の子 竹になる』

^{たくはつ} 托 鉢 を し な が ら の 旅 に 出 て 八 年 、 昭 和 九 年 に 山 口 県 小 郡 の 其 中 ^{おごおり} 庵 で ^{ごちゆうあん} 病 に 倒 れ た 時 の 句 で す 。 不 安 と 孤 独 の 中 に あ っ て 、 竹 が 人 知 れ ず 成 長 す る 様 子 を 、 自 分 が ひ っ そ り と 命 を つ な い で い る さ ま に ^{たく} 託 し た と も 、 旅 に 出 る に あ た っ て 残 し て き た 一 人 息 子 の ^{けん} 健 の 成 長 を 思 い 遣 っ た と も い わ れ て い ま す 。

私たち人間は、こうした春の息吹^{いぶき}に触れるにつけ、その背後にある目に見えない大なるものに気付かされているように思います。季節は移ろい、竹が成長するように新しい命^{めぶ}が次々と芽吹いてゆく中、自分自身もその流れの中にあって共に生かされていることを山頭火が感じたように、自らの内面はそれに見合った成長をしているのだろうかという思いが、^{とし}年齢を重ねるほどに強くなるのではないのでしょうか。

『 禅のこころ - 曹洞宗 - 』

あせらず、^{おこた}怠らず、落ち着いて、自分のいのちの移ろいを振り返りながら日々を過ごしたいものです。

今日も一日、お元気で……。

— 終 —